

プロソディー中心の英語発音指導の効果

— 日々の授業に取り入れることのできる指導法を求めて —

金丸 紋子 (カリタス女子中学校・高等学校)

1. はじめに

外国語として英語を学び、それを日常では扱うことがない環境を、**English as a Foreign Language (EFL)** の環境と呼ぶ。英語は抑揚をつけて発音されるため、ある一定のリズムが発話の中に生まれる言語である。しかし、**EFL** 環境では、学習者が受けるインプットの量に限りがあるため、第二言語（英語）の発音は母語の音声体系の影響を受けてしまう (Gilbert, 2008)。日本も **EFL** 環境であり、日本人の英語学習者の多くは、英語を抑揚があまりない平坦な調子で発話し、また、全ての子音の直後に母音を挿入した発音（所謂カタカナ読み）になってしまう。そのため、一般的に日本人の英語は **intelligibility**（話者の意図の伝わり易さ）が低くなってしまうと言われている。

近年、日本人の英語学習者に対する発音指導法について、様々な研究がなされている。主な発音指導方法は「音韻（1つ1つの音）を個別に教えていく指導法」と「プロソディー（リズム、強弱や抑揚等）を身につけさせる指導法」の2つに分かれる。日本人の英語のなまりから判断すると、多くの研究者がプロソディーを中心とした指導法で、リズムや強弱等を習得させる方法が有効であると考えている (秋田, 2005; Celce-Murcia, Brinton, & Godwin, 1996)。

中学高等学校の英語の授業は、日々カリキュ

ラムと定期テストに追われ、発音を丁寧に教られ機会は多くない。しかし生徒全体の発音の上達を目指すために、(教師の)誰もが授業中に実施できるシンプルで効果の高い発音指導法が必要である。そこで、本校のカリキュラムに沿った方法を探るため、筆者はプロソディー重視の発音講座（通年）を開設した。本論文では、その講座内容や、その効果を図るために行った発音テスト（事前テストと事後テスト）、その発音テストの結果の分析と、結果から得られたプロソディー重視の発音指導のポイントを紹介する。

2. 発音講座

2.1. 目的

「意図の伝わりやすい」英語の発音を生徒が身に付けるための指導法を検討する中で、プロソディー重視の指導法が効果的であることは、既に広く知られている。そこで、実際の中学高等学校の日々の授業の中で、プロソディー重視の発音指導を「音読」練習に絡めることが可能であると考えた。しかし、現実には英語発音の特徴を詳細に説明する時間は、普段の授業の中では十分に取ることが難しい。そこで、強く聞こえる箇所（強勢箇所）を意識した「音読」をすることで、どの程度の英語発音の特徴を習得できるのかを探るため発音講座を開講した。

2. 2. 対象生徒と実施期間

71名の中学一年生が受講を希望した。受講者を3つの小グループ（各25名程度）に分け、講座の内容は3グループすべて同じものを扱った。2011年5月から2012年3月まで、月に一度のペースで放課後に1時間、講座（全8回）を実施した。また夏期講習として4日間集中講座も行った。

2. 3. 講座内容と家庭課題

毎回の講座では、プロソディー面を中心に、英語発音の特徴を2, 3個ずつ簡単に紹介した。その内容・量は、通常授業の音読指導の際に、簡単に解説できるだけのものに設定した。特徴の内容は以下の通りである。

- 1) 強弱…英語は強く発音される箇所と弱く発音される箇所がある。その箇所は、話者の意図によって変化することもある。

例) I am going to the bookstore.

- 2) リズム…強弱を繰り返すことで、強勢の「等時性」が取れる。

例) I am going to the bookstore.

- 3) 母音の弱音化…強勢の「等時性」を保つために、強勢を取らない箇所の母音は、弱い音「シュワ[e]」に変化する。

例) I am going to the bookstore.
[ə] [ə] [ə]

- 4) 連結…最後が子音で終わる単語の次に、母音から始まる単語が来る場合、リエゾンという「子音と母音」の足し算が起きる。

例) I have an apple. ([n]+[a]=[na])

- 5) 同化…単語が2つ並ぶ時、前後の単語の音が解け合って、1つの新しい音を生み出す。

例) I have got you. ([t]+[j]=[tʃ])

- 6) 子音脱落…強勢を受けない子音が、発音されないこともある。

例) I had a hard time. ([d]→[なし])

- 7) イントネーション…抑揚であり、平叙文・疑問文や話者の意図により、変化する。

例) Is this a dog? (単純な疑問文)

Is this a dog? (疑っている時)

毎月の講座に加えて、家庭課題として、受講者に毎日教科書（会話文）の音読を課した。この音読活動こそが、発音講座の主要なアクティビティであり、本研究が探る発音指導の鍵である。音読手順は以下の通りである。1) 教科書付属の音声教材を聞き、強勢箇所にも●印を入れ、2) それ以外に気付いた発音のポイント（リエゾン等）をチェックし、3) 強いストレスの箇所を十分に意識して音読を毎日行い、4) 音読するごとに、振り返りのコメントを「音読ノート」に書き込む（図1を参照）。生徒は音読回数が15回、30回に達した後、必ず講座担当者の前で音読し、発音チェックを受け、最終的には1つの会話文を36回は音読するように指導した。

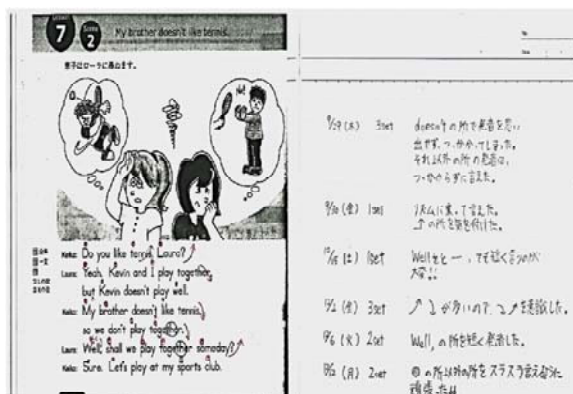


図1 「音読ノート」の一例

(教科書の会話文のページをコピーしたものをノートの左ページに貼り、右ページに音読の記録をつける。この生徒は、強勢箇所(●)の他に、イントネーション等も記入している。)

2. 4. 発音テスト（事前・事後テスト）

英文の強勢箇所を意識した音読を毎日行うことで、2.3.で紹介した英語発音の7つの特徴

定着をどの程度期待できるのかを調べるため、同じ内容のテストを、5月に「事前テスト」として、そして3月に「事後テスト」として実施した。CALL 教室を利用し、22個の英文を読ませ、発音を録音した。状況や感情を入れやすいように、全ての英文は会話調になっており、発音対象の英文の前後のやりとりも日本語で載せた。モデルの CD を3回流し、練習させた後、録音を行った。

2. 5. 講座後のアンケートとフィードバック

講座終了後(2012年3月)、生徒自身の発音への意識の変化を調べるため、アンケートを行った。約75%の生徒が「普段から上手に発音しようと意識するようになった」、「音読で発音が上達した」、「話す力が伸びた」と、自身の発音の上達を肯定的に捉えていることがわかった。英語発音の特徴の習得に関しては、表1のように、発音できるようになったと感じる項目には、ばらつきがあるが、各項目を正しく「発音しようと意識するようになった」と肯定的に回答した生徒が非常に多かった。「気づき」は効果的な「第二言語習得」への鍵となるものである(Schmidt, 1990)。今回の発音講座と家庭での音読練習は、発音上達の最初の一步を担ったことが窺える。

表 1 発音講座後のセルフチェック

	発音できるようになった(%)	意識するようになった(%)
リズム	80	85
強弱	76	79
弱母音(シュワ[a])	65	75
子音脱落	62	72
リエゾンや同化	74	77
イントネーション	70	77

そして、2012年9月初旬に、生徒にテスト結果を渡した。英語発音の特徴の項目ごとに、事前テストと事後テストのスコアを比べた一覧表にし、担当者からのコメントを添えて返却した。

3. 音声データ(事前・事後テスト)の査定

3. 1. 査定項目

生徒が録音したテストの音声データを分析するための項目は、2. 3. で扱った項目と「メッセージの伝わり易さ」の合計7つの項目とした。

3. 2. 査定基準

事例研究として参考にした秋田氏の研究(2005)で使われた査定基準を用いることにした。9段階評価とし、評価9が「ネイティブに近い発音」、評価5が「なまりがあるがメッセージは伝わる発音」、評価1が「なまりがあり、メッセージが伝わらない発音」とした。

3. 3. 評価者への事前の指導

英語母語話者(アメリカ人2名、カナダ人1名)の3名に、生徒の音声データの査定を依頼した。3人とも TESOL の修士号を取得しており、音声学・発音指導において有識者である。

査定の際に、1) 一日で行うこと、2) 静かな場所で行うこと、3) 必要であれば聞き直して良いこと、4) できるだけ9段階の評価を幅広く使うこと、以上の4点を伝え、査定を依頼した。

4. 音声データの分析と考察

3人の評価者による査定スコアの平均値を生徒の音声データの値とした。それぞれの査定項目ごとの平均スコアは表2の通りである。

表 2 発音テスト(事前・事後)の査定スコア

	事前テスト 平均スコア(/9点)	事後テスト 平均スコア(/9点)
リズムと強弱	5.9	6.5
母音の弱音化	5.3	6.2
連結	5.0	6.1
同化	5.8	6.7
子音脱落	5.4	6.3
イントネーション	6.6	6.8
メッセージの伝わり易さ	5.7	6.1

また、事前テストと事後テストから生徒1人1人の伸び率を算出し、査定項目ごとに伸び率の平均値を出した結果が表3である。

表3 発音の伸び率(事前テスト→事後テスト)

	伸び率 (%)
リズムと強弱	33.6
母音の弱音化	51.9
連結	63.4
同化	55.0
子音脱落	55.5
イントネーション	9.6
メッセージの伝わり易さ	23.1

事前テストの結果から、イントネーションの平均スコアは6.6であり、他の項目よりも比較的高い。事後テストの結果を見ても、イントネーションは査定項目の中で最も高いスコア(6.8)を出している。初期の英語学習段階においても、イントネーションは比較的 naturally 身につくものだということがわかった。しかし、評価者からの振り返りで、平叙文等によく見られる下降調のイントネーションの下がり方が十分でないこともわかった。これは平坦に発音しがちな日本人学習者の一般的な傾向でもある。

項目ごとの伸び率平均値(表2)を見ると、母音の弱音化(51.9%)、連結(63.4%)、同化(55.0%)、子音脱落(55.5%)の4つの項目が著しく伸びている。この4つの発音特性は、英文の強勢箇所を意識した音読を続けることで、自然と習得されたと考えられる。

なお、「英文の強勢箇所を意識する音読活動」を一年間続けた結果、「リズムと強弱」に関しては、十分に習得される項目であろうと筆者は仮説を立てていた。しかし、リズムと強弱の伸び率は33.6%であり、他の項目と比べると著しい伸びではなかった。評価者との振り返りの中で、多くの生徒が強勢を付けた発音ができても、英文の中の弱音化された部分(通常強く読まれない箇所なので、早く・弱く読まれることが多い)の発音が不自然であることがわかった。そのた

め、ある一定のリズムを刻みながらの発話が難しくなっていたと考えられる。

5. 今後の展望

音読は英語力の向上に非常に効果的であると広く知られている。今回の研究を通して、音読活動に「英文の強勢箇所」を意識する作業を加えることで、プロソディー面から見た英語発音の特徴の多くを習得することができることがわかった。このスタイルの音読を日々の家庭学習課題として体系的に導入し、授業中に教師が「強弱」と「イントネーション」の箇所を明示的に取り扱うことで、全体的な発音力の底上げを期待することができるであろう。具体的には、強勢を受けない箇所を「早く・弱く・一気に」読む練習や、平叙文のイントネーション(下降調)をしっかりと下げる練習等を、授業中の Listen & Repeat(教師の後に続いて生徒が発音する練習)や Chorus Reading(教師の先導なく、生徒だけで声を合わせて英文を読む練習)の際に取り入れることがアプローチとしてあげられる。「強弱」と「イントネーション」の指導であれば、教師の準備や教授方法も複雑ではないであろう。家庭学習と授業の両サイドからのアプローチにより、EFL環境で英語を学ぶ日本人の学習者も「メッセージが伝わり易い発音」を効果的に習得することができると思う。

参考文献

- Akita, M. (2005). The effectiveness of prosody-oriented approach in L2 perception and pronunciation training. Proceedings of the Annual Boston University Conference on Language Development, 29(1), 24-36.
- Celce-Murcia, M., Brinton, D. M., & Gowin, J. D. (1996). Teaching pronunciation: reference for teachers of English to speakers of other languages. Cambridge: Cambridge University Press
- Gilbert, J.B. (2008). Teaching pronunciation: Using the prosody pyramid. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schmidt, R. (1990). The role of consciousness in second language learning. Applied Linguistics, 11, 129-158.